
俺がティオでネギま！で魔界の王になる戦いに巻き込まれていた【ネタ】

恋町小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺がティオでネギま！で魔界の王になる戦いに巻き込まれていた

【ネタ】

【Nコード】

N6079Z

【作者名】

恋町小路

【あらすじ】

魔界の王を決める戦いによって王を決めないと魔法世界の崩壊に巻き込まれて全世界がぶっ壊れるらしい。ポヨ語尾の魔王少女に頼まれて、釘宮ボイスのティオになった俺が魔物同士の争いに参加することになった。

金色のガッシュベルのティオ＋魔法先生ネギま！のネタ走りのクロスものです。

「1」気がついたらティオで魔界の王を決める戦いに参加していた

わけがわからないかもしれないが言っておく。

ヒキオタ大学ニートだった俺が事故って気がついたら魔界にいた。
多分肉体は死んだ、そんな気がする。

そして今俺の前にいるのはありがちな転生の神様じゃなくて魔王様であつた。

「さて準備はいいかポヨ。今からお前を人間界に飛ばすポヨ」

ポヨ語尾な魔王少女様がこともなしに告げた。

何が何だかわからない。

突然魔界に呼び出され、何故か魔王城？ の門前にいて、SPの
ごっつい悪魔さん達に連行されたのだから意味不明だ。

ブツちゃけ怖かつたです、はい。

「いや、待つて待つて！ どういうことだつてばよ！？ 説明して
ー！」

俺の口から漏れ出たのはキュートで甘やかな少女の叫びだった。

マジの釘宮ボイスに自分自身で惚れ惚れしてしまいそうだが、今は
それどころではない。

自分が何者なのかさえわかっていないのに厄介ごとを抱えそうな
気配濃厚だからだ。

いや、釘宮キャラなのは間違いないが、誰なのか確信がまだ持て
なかったのだ。

「魔界の魔王を決める戦いを千年振りに開催するポヨ。お前は私が魔王候補に選んだポヨ」

「ま、魔界の王、だと……？」

「そうポヨ。お前の持つている本に魔法を封じ込めた。本を読むマスターを見つけない限り能力を解放できないポヨ。同じ魔物の子を探して戦うポヨ。本を燃やせばお前の勝ち。人間界に送り込んだ、お前を含めた一〇〇人の魔物の子と戦い、最後の一人になれば魔王になれるポヨ」

その設定はガツシユベルかよ！ ということはこのボディは？
釘宮ボイスの魔物は一人しか心当たりがないのだが……。

「ティオ、ボケツとするなポヨ」

キヤー、やつぱりティオでしたあああつ！！

やったね！ 幼女勝ち組決定！！

つてヤベエエエエエ！！

「イヤーツ！！！！！！！！！！」

ティオやベエエエ。

攻撃力皆無な防御特化＆回復系の魔物だろ！？

俺様一人で生きていける自信がねえ！。

マスターに会う前に始末されちまうんじゃないかねえか？

恵に会えれば何とかなるのだろうか？

「逃げるなポヨ」

「は、はひい……」

両腕を悪魔達に掴まれ、正面には魔王少女様。

四面楚歌な俺。
に、逃げられん。

「ティオ、訊くポヨ。魔界が壊れる危機ポヨ」

「はい？」

「あつちの魔法世界が崩壊の兆しがあるポヨ。ついでのその余波で魔界も危ないポヨ」

魔法世界だと……？

ガツシュにそんな世界観あつたっけ？

「新しい魔界の王を定めて魔界の基盤を創り直すつもりポヨ。ティオには協力してほしいポヨ」

「きよ、協力っていつても、私の魔法の力じゃ無理だつて！ 弱いし」

「ティオが魔王に相応しい者に手を貸して勝利に導くでもいいポヨ。可能ならティオが魔界の王でもいいポヨ」

「だ、誰でもいいってわけ？」

「はつきり言つと、魔界を建て直せば誰でもいいポヨ」

「どんなに悪逆非道なやつでも？」

「そうポヨ？ 人格など魔界の危機を回避できるならたいしたことではないポヨ。魔法世界のとばっちりで魔界の崩壊が起きれば人間界を巻き込んだ惨劇になるポヨ」

「崩壊の連鎖が起きるってことが……」

コクコク、と魔王様は頷いた。

「時間がないポヨ。さっさと行けポヨ」

そして俺…ティオは魔法陣に座らされ、人間界に転移させられて

いた。

そこは俺が知るガツシュベルの世界ではなく、魔法先生ネギま！
の世界であることに気がつかないまま。

【1】気がついたらティオで魔界の王を決める戦いに参加していた（後書き）

できれば非魔法関係者が拾うのがいい気がするが……

【2】気がついたら魔物に遭遇してた

人が溢れる雑踏を当て所もなく歩く。

ここはどこだろう？

すでに歩き疲れて足が痛い。

ハア、と深くため息を吐いて、思わずしゃがみ込んでいた。

次の瞬間、ドン、と背後に衝撃を感じてティオは突き飛ばされていた。

「気をつけて歩けやガキ」

「ご、ごめんなさい」

頭を下げて私——ティオは街角のビルの隅に身体を寄せる。

ヒキオタニートの頃の影響か人にぶつかっても謝ることしかできない。

今の私は無力だ。

魔物同士の戦いが始まればいの一番に標的にされる可能性が極めて高い。

初期の魔物の子の戦いはそうした弱い者の淘汰から始まる。

魔物と言ってもピンきりで、竜種の子どもとかいなくもないわけで、そんなのが出てきたらまともなパートナー、本の読み手と出会えてもティオの魔法では対抗することができない。

やはり仲間、それも強力な味方が必要だ。

原作沿いで仲間になるのは……。

ブラゴは無理くせえ、奴は孤高の男だ。

キャンチヨメは初期は使えねえ。

逃げ回るなら何とかなるけど相性がいまいち。

ウマゴンはサンビームさんに会うまでが長かったな。
会えればいいが。

ガッシュとならうまくやれそうな気がする。

何といっても原作では主人公だ。

成長株なんだが。

とそこまで考えてみたが、どうしても腑に落ちないことがある。
ここは本当にガッシュベルの世界で合っているのだろうか？

あのポヨ魔王様は原作にいないはずで、魔界の王はガッシュの父親のはずなんだ。

焦る、もしそうなら原作通りの仲間を集めたとしてもガッシュのパートナーが清暦ではない可能性が高くなる。

そして敵に回るのかもしれないのだ。

本の読み手には欲に目がくらむ人間も多いのだ。

原作基準でものを考えれば足元を救われる危険が高い。

もし、そうだとすると大海恵に出会えなければ？

最悪、食い物にされてしまうかもしれないのだ。

懸念は潰していく必要がある。

私はまず本屋を探して見つけると、アイドルコーナーを探す。

ない…大海恵の名が存在しない。

試しに店員に尋ねるが、そんな名前のアイドルやグラビア少女はいないと言う。

それでも、と食い入るように探していると、アダルト写真集を眺める男性客に怪訝な視線を向けられた。

ヤバ…と本屋から一目散に退散する。

ハアハア。

ヤバイ、マジでパラレル世界かもしれない。

恵がない。

唯一の希望は打ち砕かれた。

どうやってパートナーを、本の読み手を捜せばいいんだ。

強くて明るくて、ティオを支えてくれるはずの恵がない。

原作知識が使い物にならない以上、自力で這ってでも本の読み手を見つけるしかないのだ。

戦うことを拒否すれば本にかけられた呪いが戦いを望むマスターを引き寄せる可能性もある。

そうなってからでは遅いのだ。

戦いの道具にされるのはごめんだった。

そのとき――

何だ、この感覚？

何かが弾けるような感覚。

目に留まったのは銀行だった。

何だ？

自動扉が開き、大柄な男と子どもが飛び出してくる。

子ども？

その少年の姿を見て腕に鳥肌が立った。

あれはまさか……。

パトカーがサイレンを鳴らしながら停まるとその二人の前に立ち塞がり、数台のパトカーが壁を築く。

ギョルツッ!!

氷が地面を凍結させ、大男と少年が走り出した。

それを追いかける警官達がもんどりうつて倒れる。
追いつがろうとする警官の前に氷の柱が乱立して行く手を阻む。
街中で使うのは信じられない光景だが間違いない。

「ま、魔法……」

間違いない。

ギコルは氷の魔法だ。

そしてその使い手は…青い髪の少年。

奴が魔物だ。

もうパートナーを得た魔物がこの町にいる。

危険、危険だ。

ここから早く逃げなければ、そう思考しながら生き残るためならばあの二人とつるむことも考えなければならぬ。

考える、何か手札はないものだろうか？

ティオはこんなこと考えなかっただろう。

当然だ。

魔界から放り出され、ただ逃げ惑い怯えているしかなかったのだ。

それでも日本で最高のパートナーに出会えた。

だが私は違う。

ここに恵はいないかもしれない。

だったら生き延びるためならなんだってして見せよう。

急がないとあの魔物の気配が消えてしまう。

ティオはあの二人の後を追って走り始めた。

【3】魔物の名はレイコム

「へへへ、こいつは笑いが止まらねえぜ」

男が笑う。

裏路地、廃ビルの一角。

剥き出しになったコンクリートと鉄、埃っぽい暗い部屋。

男が床にドサリ、と重いバッグを地面に投げ出すと土煙が舞い、バッグの隙間から札束が垣間見える。

まともな人間が暮らす環境の部屋ではなかった。

「おめーの言ったとおりちよろいもんだぜ。見たか、ポリどもの慌てっぷり。スカツとしたぜ」

「次は魔物を探す」

「おい、レイコム。本当にお前以外に魔物なんてのがいるんだな？」

「ああ」

「で、そいつは魔本を…こいつを持ってるんだな？」

「そうだ」

そう答える少年の声はどこまでも冷え切っている。

銀行強盗の犯人である二人組み。

一人はスーツに派手な装飾品を身につけた男。

その片割れである少年は薄汚れた服を身につけている。

特徴的なのはその青い髪と目だった。

どこか普通の少年とは違う異様さを身にまとっていた。

「はっ、面白いじゃねえか。で、どうやって探す？」

男は思案したのも束の間、悪い笑顔を浮かべて口を歪ませる。

どこまでも人相の悪い男である。

男は小さな冷蔵庫からビールを取り出して、一気にあおって飲み干すと部屋の隅に投げ捨てた。

電気は不法に取り込んだものだった。

その様子を少年は自分も欲しいとは言わずにただ眺めている。

「あそこにいたさ」

「何？」

「子どもがいたろう？ そいつが本を持っているはずだ」

「あそこにいたのか。世の中つてのは狭いな」

「魔物は同じ魔物を探知できる」

「アンテナってことか。それじゃあさっさと探そうぜ？」

「必要ない」

「何故だ？」

「あちらからやってくる。もうこの敷地内にいる」

「一人か？」

「パートナーを連れている可能性はある」

「こいつの出番でわけか」

魔本を手に札束を弄っていた男が立ち上がる。

「組の連中の差し金、じゃあねえだろうな」

ヤクザを思わせる風貌の男、細川が呟く。

底意地の悪い頭で組の連中の差し金ならこいつで黙らせてやるんだが、と持った魔本を見る。

こいつがあれば俺は無敵だ。

鉄砲程度で俺は殺られねえぞ。

組の金を持ち逃げしたがその金はもうない。

銀行から盗んだ金は俺のものだ。

取り返そうとする奴がいるなら殺るだけだ。

「魔物の子どもが組織と手を結ぶのは考えにくい。お前のようなヤクザ連中の元締めでもパートナーにでもない限りな」

「気色悪いこと言っんじゃねえ」

細川はレイコム голову殴りつける。

最悪だ、そんなことになったら最悪だ。

本を奪われれば俺は無力だ。

そうだ、この本だけじゃ足りねえ。

ここに侵入した魔物から本を奪えばいい。

相手はガキだ。

本を奪って脅せば言うことを聞くさ。

聞かなかったら仕方ねえ。

あの世に行ってもらっただけだ。

「ククク、よし、レイコム、そいつを捕まえる」

「捕まえてどうする？」

「決まってるさ。俺達の仕事を手伝わせるのさ」

「……」

感情のない視線が細川を捕らえた。

そして壁の向こう側を見つめる。

バカな男だ。

レイコムは酷薄なまでの冷笑を口元に浮かべていた。

金金金、金のことばかりを口にするつまらない人間。

だが扱いやすい。

魔本の力があればそんなものいくらでも手に入るのだから。

だが、手伝わせる？ 王を決める戦いをか？ バカなことばかり

言うがそれも悪くはない。

俺より力がある奴なら始末するしかない。

だがあの場で感じ取った魔物の気配はどこか軟弱であった。
屈服させるのは容易いと踏んだ。

だからこちらにも気配を消さずにばら撒いた。

案の定釣られてやって来た。

だが問題はパートナーだ。

常識的な人間なら細川の言うことになど耳を傾けないだろう。

そうであるならばパートナー諸共始末するだけだ。

あの魔物にパートナーはいるのか？

不安要素はそれだけだ。

俺は生き残ってみせる。

無表情なままレイコムは細川を促して歩き出した。

【3】魔物の名はレイコム（後書き）

レイコム＆細川はアニメ基準で登場。
MOB的配役はガッシュ基準で配置。

【4】無謀との対峙

見上げた鉄編みのフェンス。

空は暗く、夕刻を越えて周囲は闇に包まれ始めていた。

ティオはフェンスに開いた穴をくぐり廃工場の敷地内に潜入していた。

私が――いや俺か。

どういうわけか一人称まで無意識の内に「私」に変化していた。

この体になってから以前の俺、という人間の記憶がすっかり抜け落ちてティオの意識に成り代わっていくような気がしていた。

生前の「俺」という人格が何者でどのような生活を送っていたのかもわからない。

クソ、理不尽にもほどがある。

もっと強い魔物は山ほどいるのにパートナーがいなければ最弱に近いティオで何ができるというのだろうか？

魔物である以上は保護を他者に求めることはできない。

いつ他の魔物が襲ってくるのかわからないのだ。

無関係な人間を巻き込むのは避けたい。

私にできる選択肢は二つ。

魔本を読めるパートナーを得るか、魔物同士つるんで下につくかだけ。

それ以外は敗北しかないだろう。

生き延びるための選択。

大海恵が得られないのならば残る選択は一つだけだ。

無様で愚かしい選択だとわかっている。

だけどパートナーとなる人間を探し出す機会はこのままでは得られない。

放浪するのはゴメンだ。

そうしている間にも魔物同士の戦いは進み、成長する機会が失われるのだから。

だったら常に前線に近い場所で他の魔物を利用し、パートナーを探すしかないのだ。

その機会を魔物とそのパートナーが与えてくれるかわからないが、これは一つの賭けだった。

信頼や友情を得ようとは思わない。

鋼鉄で心を武装しなければやられる、そう思わなければならない。

だから私はここに来た。

無様でも太く生き残ってみせる。

「止まれえ……」

声が闇の中に響く。

ティオはゴクリ、と唾を飲んだ。

身体が震える。

舌がもつれそう、泣き出したい気持ちでいっぱいだ。

相手は魔物でパートナーを得ている。

怖い、怖い怖い！！

カツカツカツ、と靴音が響く。

工場の窓、そこから視線が強くティオを観察していた。

わずかな月明かりがティオの足元を照らし出す。

「取引がしたいの」

わずかな間。

「取引だと？ ガキ、お前魔物だろ。パートナーはどうした」
「パートナーは……」

風が音を切る。

顔を上げ対応しようと警戒するが、突き上げるように咽喉元を掴まれ、その怪力で首を絞められていた。

魔物！

そう思ったときにはすでに遅い。

「ぐうあ……」

じたばたもがくが、同じ魔物の男の子の腕力に敵うはずもなく、ティオは涙目に抵抗を放棄していた。
青い髪の少年がティオに囁きかける。

「貴様の目的は何だ？ パートナーは？ 本…を持っているな。取引とはどういうことだ？」

冷酷な目がティオを捕らえて離さない。
その目をティオは勇気を振り絞って睨みつける。

「よくやったレイコム。そいつから本を奪え」

闇の中から野太い男の声が響く。
レイコム、それが目の前の魔物の名前か。

「や、止めてっ！」

「お前…まだはぐれだな？ 何が目的だ」

「おいレイコム？」

無視され苛立つような男の声にレイコムが振り返る。

「こいつはまだパートナーを得ていないはずだ。目的は不明だが、本を渡してもらうぞ」

「ま、待って！」

「待ってもクソもねえんだよ。少し調教してやろう」

暗がりから人相の悪い大男が姿を現す。

その手には光り輝く魔本。

レイコムがティオを突き飛ばす。

その目が光る。

ギコルツ！！

白い霧が舞い、ふぶき凍結する地面、波上に広がったそれはティオを避けて背後彼方まで凍り付いていた。

なんて威力だ！

それを見て体の芯から震えが止まらなかった。

あんなのを喰らったらひとたまりもない

立ち上がるうにも逃げようにも足が動いてくれなかった。

月明かりを背景に魔本の持ち主とレイコムの姿が浮かび上がる。

無謀にもほどがありすぎた。

取引など通用する相手ではない。

ティオはもう駄目だと目をつぶっていた。

【5】思わぬ助け その少年の名はテッド

ガンツ、コローン、と音を立てて何かがコンクリートの地面に叩きつけられた。

同時に男の悲鳴がこだまして周囲に反響し、ビクリ、とティオは肩を震わせる。

その音に意識を引き戻され、ティオは目を開いていた。

何、何が起こったの？

「ぐああっ、なんじゃこりゃあ」

叫ぶ男、ズボンが黒いもので汚れている。

零れ落ちる液体、微かに匂うのは灯油の匂いだろうか。

灯油の缶だと理解するが、何故それがそこにあるのかティオが理解するまで一秒あまり。

コポコポ音を立て缶から液体が零れ落ちる。

闇の中ではそれは黒染みとなって地面に溜まって広がっていく。

「何？」

疑問が口から漏れる。

何が起こっているの？

「へっ、こつちだぜおっさん」

「テメーッ！」

声がる先、頭上高い位置に一人の少年が立つ。
魔本のパートナーが口汚く罵りの言葉を上げる。

顔はこの位置からでは見えない。

「仲間がいたか」

レイコムの冷静な声、その細まった目がティオを凝視して威圧する。

違う、仲間なんかじゃない。

あんな子は知らない。

だがそんな言い訳の言葉は出てこない。

好機なのかわからない。

しかしあの少年が何者なのかもわからない。

「レイコム、こっちきやがれ」

男が叫び、ティオから視線を外したレイコムが前方に歩き出す。

「お前動くなよ？」

横目にその言葉を発して前に向き直る。

その瞬間はまるで蛇に睨まれた蛙だった。

そつだ絶好の逃げるチャンスじゃない。

だけど駄目だ、足がすくんでいる。

靴が：底面が凍りに張り付いて剥がれない。

「おい、お前ら、女を二人がかりで苛めるなんざ男の風上にも置けねえぜ！」

「うるせえっ！俺達を嵌めようとしやがったな。てめーも魔物かっ！」

「あん？ だつたら？」

「ぶっ殺してやるぜ。レイコム！」

頭上を見上げたレイコムの視線が闇夜でもわかる金髪の少年の姿を捕らえた。

ギコルツ！！！！

呪文が唱えられ魔本が光り輝く。

容赦のない凍てつく波動が金髪の少年に向かって襲い掛かる。その瞬間、その少年が笑ったようにティオには思えた。

少年が跳んだ。

壁を蹴り、体を捻らせて冷気を避けきると、体を回転させ手に持った瓶を投げつけていた。

「フン、どこ投げてやがる」

男が吼える。

違う。

わざと外して投げたんだ、とティオには理解できた。

その瓶の機動は孤を描いてアスファルトに叩きつけられて割れた。導火線には火がつけられていた。

そこは灯油が零れ落ちた場所――

赤い火が燃え上がり、零れた黒い染みを追って燃え伝わる。

「アチッ！ アチチっ！！ レイコムー！」
「チッ」

舌打ちするレイコム。

パートナーを狙った攻撃、二段構えの策であることに遅れを取っていた。

何より不味いのは火だ。

本を燃やされれば存在を保てなくなってしまう。
故にレイコムは謎の少年と対峙することも、愚かな少女に構うことも捨てていた。

「ギャーツ！」

「黙れ」

魔本を掴み、叫ぶ細川から奪い取ると、レイコムはその巨体を軽々と投げ飛ばしていた。

立ち上がる砂埃の向こうは砂が敷き詰められている。

ギョロリ、と地面に降り立った金髪の少年をレイコムは睨みつけていた。

動くわけにはいかない、どこにこいつのパートナーが潜んでいるかわからない。

女はフェイク、その実の奇襲。

まだ手札を残している可能性がある。

「い、てえ……」

細川が呻く。

火のショックと投げ飛ばされたダメージでまだ起き上がってこない。
い。

「おい、平気か？」

「え、ええ？」

ティオに声をかけたのはリーゼントスタイルの髪型の少年だった。
強い意思を秘めた真っ直ぐな瞳がティオを捉えていた。

この目を、いやこの少年を私は知っているような気がする。

「ぐずぐずすんな、逃げるぜ！」

「ま、待って、足が、靴が剥がれないって」

「めんどくせ、脱げ」

「え？ ちよつとお？」

腰を抜かしたままのティオの体を持ち上げようとし、足先に手をかけてさつさと靴を脱がせてしまう。

持ち上げられたティオをお姫様抱っこにして、少年は一目散に走り出していた。

「ちよつ、もつと丁寧に運んでええええ！！」

「うるせー、そんな暇ねえっ！の。助けてやったんだからガタガタ文句言っくんじゃねえ」

「っーかあんた誰よ！ どちら様っ！？」

「ああんー？ 耳闊歩じいてよく聞きやがれっ！ 俺様はテッド様よ！」

次の瞬間、ボカボカ、テッドと名乗った少年の頭をティオの拳骨が見舞う。

「うつさいー。耳元で怒鳴るなあっ！」

「助けたのに何気にひでえ……」

だがテッドは速度を落とさず、ジャンプするとフェンスに足をかけ背後を振り返る。

追って来る気配はない。

いずれまた遭遇するかもしれない相手、テッドは口元に不敵な笑みを浮かべ、そしてティオを抱えたまま闇の中に姿を消した。

「くそお、あのガキヤー」

「あいつもはぐれか……」

背後で起き上がった細川、レイコムは二人が消えた方角を眺めて
呟く。

何か策があるようには思えない。

魔物の気配は探れるものの、そのパートナーとなる人間の動きま
では察知できない。

慎重を期したが故に逃げられた。

「殺す、殺してやる。コケにしやがって！」

「そんなことをしてる場合じゃない」

「あんだと？」

レイコムが指差した方角を見て細川が黙る。

遠くからサイレンの音、敏感な耳はそれを捕らえ顔つきが変わる。

「サツか。もう嗅ぎつけやがったか」

「相手にするか？」

「バカ言え、ずらかるぜ」

金を回収すつぞと言って隠れ家に足早に向かう細川。
もう一度、レイコムは二人が逃亡した先を見据える。

「次は逃さない」

酷薄な瞳が闇夜を睨んでいた。

【6】麻帆良へ

気がついたらティオで魔界の王になる戦いに巻き込まれていた私。飛ばされた世界でパートナーを探そうにもアイドル大海恵は存在せず、早くも脱落か、と思ったが、銀行強盗の二人組みが魔本の読み手と魔物だった。

生き延びるためにどうにか食らいつけないか、あがこうとしたが無謀だった。

凍りつくような目をした魔物レイコムにティオは追い詰められ、そこに現れたのはテッド。

その少年テッドもまた魔物であった。

「ねえ、どうするつもり、これから？」

「どうって、旅を続けるつもりさ」

「そう……」

車の荷台に背を預け、テッドが答える。

二人が乗っているのはトラックだ。

あれからテッドが足が必要だ、と目をつけたのが近くの工場で積荷を載せ終えたトラックだった。

走り出すタイミングを見計らって二人で乗り込んでいた。

ティオは本の入ったリュックを抱きしめる。

テッド。

レイコム。

その日の内に二人も魔物に遭った。

わずかなうる覚えの知識ではレイコムは比較的初期にガッシュ達に倒されていた記憶がある。

パートナーまではよく覚えていなかったのだが、ヤクザ者のようだった。

あのコンビは原作に近い出会い方をしたのだろうか？

わからない。

恵がないからといって他の魔物のパートナーまで違うとは言い切れなくなった。

そして目の前にいる少年テッド。

原作ではガツシュと友情を築いていた。

味方になってくれるだろうか？

助けてもらい、感謝はしているが気がかりは残る。

テッドのパートナーとなる人間次第でどうにでも立場を変えてしまっ
まう。

魔物が戦いを望まなくても魔物はやってくる。

そして戦いを完全拒絶した魔物は魔本に支配されてしまう。

コルル……。

一人の魔本に心を奪われた少女が思い浮かぶ。

ティオの友達で心優しい少女だった。

悲しい存在。

あの子みたいな犠牲者は出したくない。

だからガツシュはやさしい王様を目指した。

今の私の記憶は生前の俺と、ティオとしての私の記憶が入り混じ
っている。

原作知識のある俺、そしてティオとしての意識と記憶だ。

私はどうなのだろう？

今の私はティオの体を持った別人格だ。

私にやさしい王様の資格はあるのだろうか？

自分の目的のためにレイコム達を利用しようとした。

不発に終わったが、あれは難易度が高すぎた。

だがテッドはどうだろう？

そう考える自分がたまらなく嫌だった。

やはり私はやさしい王様になる資格などない。

「おい」

「へ？」

「何ボーっとしてんだよ？」

「べ、別に何でも……」

テッドがポケットに手をつ突っ込んで何かを差し出す。

「何これ？」

「食えよ、腹減ってんだろ？」

それは折れ曲ったガムだった。

お腹なんて、と言いかけてティオのお腹がグウツと音を立てる。

「ねえよりやましたろ」

「テッドのじゃない。受け取れない」

「バーカ、拾ったもんだから気にすんなよ」

「ちよっ、気にするわー!!」

「どなんなよ……」

デリカシーは皆無。

テッドって野生児だな、としみじみとため息をつく。

寝ててもご飯が食べれるヒキニート時代に戻りたい。

「まあ飯は心配すんなよ」

「はいい？」

「これ、見るよ」

テッドが今度は後ろのポケットから紙の束を取り出す。

よく見ると札束だった。

万札百枚の帯止め付きだ。

「な、何でテッドがそんなもの持ってるのーっ!!」

「あいつらからばくった」

「あいつらって……。あの？」

「ああ、どうせ盗んだ金だろ？ あいつ等が持つより俺等が有効活用しようぜ。つーかこれで何が食えるんだ？」

テッド……。

お金のことには疎そうだ。

たぶん私と同じでこちらに来て浅いのだろう。

だが貨幣価値と金銭感覚は俺としての知識があるからばっちりだ。経済観念を教えておかないと大変な目に会いそうなのは目に見えるていた。

だから一通りレクチャーする。

「へえ……。結構大金だな」

「そうよ、東で人に見せるのは止めなさいよね」

「OK OK。ほれ」

「何？」

テッドが差し出すのは札束の半分ほどだ。

「お前の取り分だよ。こつちのこと教えてもらったし」

「う、受け取れない……」

「何だよ？ 金がないと何もできない。お前が言っただろが」
「そうだけど……」

銀行強盗した金をまた盗んだもので、それが意思を鈍らせる。

「テッド」

「何だ？」

「この先、例えお金に困っても、人から盗むなんてしちゃ駄目」
「この金はいくらが盗んだものだぜ？」

「わかってる。だけど、こういうものは真っ当に働いてお金を手にした人達が預けたお金なの。他人が必死に働いたお金を奪っていい暮らしをする。そんなのよくないから……」

「ああ、わかったぜ。お前の言うことわかるよ」

「本当？」

「ああ、たりめーだろ。俺は男の中の男だからよ。だから困ってもできるだけ真っ当に金を手に入れる。それでいいか？」

「うん……」

「へっ……」

鼻を擦ってテッドが笑う。

いいやつだ。

気持ちのいい男とはこんな少年のことを言うのだろうと思った。

「まあそれとこれは別だ。俺達はすごく困ってる。これがないとパトナーを探せねえ、違うか？」

「そうだね」

「じゃあ、受け取れ」

テッドがティオに札束を握らせる。

きつちり数えて五〇枚。

薄いが今の私にとって心強いお金だった。

ガコン、とトラックが揺れる。

今どこを走っているのだろうかと後部から顔を覗かせる。

外は朝焼けの日差しが差し始め、もやがかつた空が見えた。

『麻帆良まで5 km』

緑の看板にはそう表記されていた。

【7】麻帆良の二人

こつそりトラックの後ろから小さな子どもが二人飛び降り、片割れのティオが痛くなつたお尻をさすつて深呼吸をする。

ちよつと冷たいが空は晴れやかでティオは空の雲を目で追っていた。

「ティオ、どうか行く当てあるか？」

「うーん。とりあえずは地図が欲しいかな……」

腕を組んでテッドにそう答える。

ここが日本であることに間違いない。

看板も言葉も日本語だ。

常識的に考えればここが日本の一都市であるはずである。

しかしある一点に置いて、ティオが知る日本の都会風景とは言い難い光景を目にしていた。

でかい…でかいよ！！ あの木！！！！

ティオが見たもの。

それは巨大な樹木。

小高い場所に緑に囲まれ、一本の樹がそびえ立っている。

いや、そんなただの大きい、というレベルではない。

天高く突き上げるようにそれはある。

えー、マジここ日本ですか？

町並みも西欧を思わせる様式で観光のための施設なのかと疑ってしまうが、行き交う人々は観光客もいるようだが普通のサラリーマンに学生もいる。

その雑多な風景がここは観光施設の街などではないことをティオに理解させた。

朝食を目に留まったファーストフードの店からテイクアウトして、公園で二人でそれを分け合って食べていた。

この味は久々だ。

飢えたお腹にいくらでも詰め込めそうな気がするがお金が勿体無い。

一人二人前程度を平らげて、ティオはようやく落ち着いた気分になっていた。

「それにしてもでっけえ木だなー」

テッドがブランコの上に立ってその方角を眺める。

「何なのよあれは……」

「んじや行こうぜ」

「はあ？ どこに」

「見物だよ、見物。あの上登ってみねえか？」

「テッド、そんなことしてる場合じゃ」

「ほら、本のパートナーが見つかるかも」

そんなんで見つかるか！ と突っ込んで、ティオはじろっとテッドを睨む。

「バカ言っでんじやないわよ。そんなんで見つかったら苦労しないって」

「まあそう固いこと言っなよ。気分転換しようぜ。寝床も見つけねえと」

「それは同意だけど……」

「どした？」

ティオは思い切り肩を下げて息を吐き出す。
見たのは自分の足元だ。
なんか色々あってすっかり忘れていたのだ。

「靴……」

「あん？」

「靴がないんだってば！　どっかの誰かさんのせいであ……！」

「あー。いるのか？」

「当たり前でしょ！！　常識でしょ！！　あんた脳膿んでるの！！
！」

「ぐ、ぐるじい……」

気がつけば感情的にテッドの首をチョークしていた。

テッドの首がティオの手の中で二ヨロ二ヨロ伸びている。

思わずうわーキモー、と手を離していた。

「し、死ぬかと思ったぜ」

「くだらないこと言っていないの。この世界の人間はみんな靴履くのが常識だから！」

「OK　理解したぜ」

ヤベー、ついつい手が出たが、精神がかなりティオ寄りに同調してきているようだ。

どれだけ制御できるのか……いや、制御する必要があるの？

ティオであっても俺としての知識はしっかり働いているようだ。
どちらかがどちらかの精神を飲み込んでいるという実感はない。

俺とティオの今の関係ってなんだろうか？

転生、は違う。

トリップ？

うん違うな。

憑依……？

一番ありえる、というかそうなんじゃないかと思う。

知識的にこのティオには魔本の魔物としての経験は蓄積されていないようだ。

つまり恵やガッシュや清麿、それと他の魔物との戦いの記憶がない。

その知識があるのは俺である。

このテッドにしてもそうだ。

すると、この魔界の王を決める戦いは原作の振り出し地点にあるのだろう、と推測してみるが、いろいろと発生条件が異なるのが私の頭を悩ませている。

「おい？」

「あ、ごめん。考え事してた」

「いや、いいさ。ティオは頭がいいからな。頭脳労働は任せたぜ」

「はあ？ あんたも考えなさいよ」

「いいけどよお。俺が思いつくのは飯と寝床くらい。あとチェリ…なんでもねえ」

語尾で言いよどむがティオは聴いていなかった。

そう、これからどこへ行けばいいのか、まず地図を手に入れる、と頭にインプットする。

「よし、行こうぜ」

「どこへよ？」

「靴、買いに行こうぜ。俺からの詫びだ」

「靴くらい……」

「いや俺が金を出す。悪いことしたからな」

「ふうん…」

妙に義理堅い。

そついうテッドの素直なところは好ましかった。

あ、あくまでこれは一般常識的な意味でだからね。

テッドへの変な意味はないんだからっ！！

「じゃあ、靴を買いに行きましょって、こ、こらあ！！」

テッドがひょいっとティオの体を持ち上げてお姫様抱っこにしていた。

昨夜も抱えられたが、あの時は緊急だったから気がつかなかったのだが、テッドの腕は力強く、胸板も固かった。

何だか無性に恥ずかしく、温かい体温にティオの心拍数は上昇する。

こ、これはただの生理的現象だつてば！！

「レディを裸足でエスコートするわけにはいかねえだろ？」

「人前だつて下ろしなさいよ」

「靴屋はどこかな？」

「聞けっつーの！」

抗議するティオを無視して歩き始めるテッド。

下ろすつもりはないらしい。

道行く人の視線が痛い。

程なくして街路に靴屋を見つけると開店の時間を待って、二人は店内に消えていった。

【8】テッドとティオと靴屋

「おっさん、一番いい靴を頼む」

「畏まりました。では足のサイズを測ります」

やたら丁寧な銀髪の年配の店主が物差しでティオの足を測る。
素足だったことはなにも言わないのはプロだからだろうか。

「えー、一番って……」

「女の子なんだからお洒落しようぜ」

遠慮がちなティオに片目を瞑って見せるテッド。

いやそっじゃなくて、お金無駄使いすんな！

少し前に教えたのにテッドはどこ吹く風である。

「ちょ、テッド」

ティオはテッドにひそひそと話しかける。

店主は店の奥にいるようだ。

「何だよ？」

「私、普通の靴でいいんだってば」

「普通ってどんなのがいいんだよ」

首根っこをかくテッド。

「えーと、普通は普通よ？」

首を傾げるティオ。

靴っていえばスニーカーとか？ とティオは陳列されている靴の棚を見る。

スニーカーは勿論、紳士用婦人用、子ども用と種類は千差万別だった。

元々、靴には然したるこだわりがなかった前世なので？ 靴など履ければいいのだ、という観念でしかない。

革靴にスニーカーとサンダルが常に履く靴だった。

そこにお洒落が入り込む隙など微塵もなかった。

ハハ……。

ヒキオタニートなんてそんなものだ。

そんなわけで、女の子がどんな靴を履くのかすらわからない。

ティオの記憶では魔界の子どもは靴を履かないのも珍しいことではない。

元々足の裏まで頑丈なので必要のない魔物もいる。

ダメだ、まったくあてにならない！

「お待たせいたしましたお客様、当店で一番の靴でございます」

店主が靴箱を持って現れる。

中から現れた靴は一目で高級品であることがわかるものだった。

キラキラと店の照明を受けて表皮の光沢が光を反射している。

シンプルなようでデザインと機能性に優れた靴だった。

店主がイタリアがどうか、職人がどうか説明を始めるがまったく耳に残らなかった。

思わずその靴に見惚れてしまったのだ。

「おおすげえな。マジいい靴だぜ」

「た、高い……」

付けられた値札を見てその値段に目が飛び出る。

おいおい、子ども靴にそんな値段だったら大人用はどうなのよ？

「高いな、おい」

「当店一番の靴でございますから」

店主は涼しげな顔でテッドにそう告げる。

「も、もっと普通のでお願いします！」

「そう慌てんなよ。テイオ、試しに履いてみるよ。いいよな？」

テッドがテイオの言葉を流して店主に訊くと、「はい、勿論でございます。試着コーナーはこちらです」とそちらを指差した。

「サ、サイズ平気かな……」

「さっき測ったろ？」

「値段、高すぎよ。履いたら買えって言われたらどうすんのよ」

「買えばいいじゃねえか」

「テッドオ」

メラメラ気分的に業火を背負って睨むが本人はさっさと向こうに歩いていってしまう。

靴屋に入ってからテッドに主導権を握られっぱなしだ。

調子が狂う。

何せ女の子扱いだ。

いや、女の子なのだが、照れ恥ずかしさに茹ってしまいそうだ。

「どうぞこちらへ」

「く……」

仕方ない、覚悟ををくくる！

靴台に足を乗せ、差し出された靴に足を通す。

「おー、ぴったりじゃねえか。可愛いな」

「え……」

「お似合いです」

「そうだな」

こらそこ連帯してんじゃないわよ！

にしても、このフィット感はすごくしっくりきて、脱ぐのは正直勿体無い気分だった。

イタリアの名のある職人が作った、というのも納得だ。

「なかなかいい履き心地ね」

スニーカーなど比べ物にならない、が、これは不味いのだ。

私達は魔物同士の戦いをしているのだ。

靴など履き潰して当然、汚れたりなくなったりなど当たり前のはずだ。

生まれて初めてプレゼントで靴を貰うが、こんな高級品である必要はない。

そう、ただのスニーカーでいい。

分不相応、お金も勿体無い。

そう言おうとしたらもう片方の靴が差し出される。

「両方履いてみるよ。すっげえシャンだぜ」

「えーと……」

もう片方の靴に足を通す。

まるで履く前からわかっていたようにその靴はぴたっ、とティオの足に収まった。

「あつちまで歩いて試してみろよ」

テッドが店の端っこを指す。

「うん……」

踏みしめる感覚に嬉しさを感じて歩き出す。
キュキュツと足の裏で靴底が音を立てる。
いい靴だ。

ティオが歩き出すとテッドがにやりと笑い店主は微笑み返した。
戻ってくると、開口一番テッドが告げる。

「ティオ、その靴はお前のもんだ」

「へ？」

「もう買った」

「な、なにー」

「お買い上げありがとうございます」

「ありがとな、おっさん」

領収書を受け取るテッド。

啞然としたまま足元の靴をみるティオの手を引いて、テッドが歩き出して二人同時に店を出た。

テッドオオオオ。

謀ったわねえええ。

それにしても抜け目がない。

助けてくれた時も、金を盗んだ時も、靴を買ったこともだ。

無駄使いはしたけれど、こうして靴を買ってくれたのは感謝したい。

前の靴は仕方なく捨ててしまったけど、あの靴に愛着は特になかった。

元からボロボロだったしね。

テッドの要領のよさは見習っていいところだ。

私達はお互いに足りないものを埋めあう関係を築きつつある。パートナーとなる人間ともこういう関係が望ましい。

テッドとは敵になりたくない。

そう考えながら、ティオはテッドと街を見学しながら歩き出した。

【9】展望台 はじめての友情

世界樹——そのネーミングは正直何なのと思ったのだけれど、それはまさに世界樹と呼ぶに相応しいものだった。

私とテッドは今遙か地上を離れ、空高い場所にいる。といっても空を飛んでいるわけではない。

世界樹の展望台からは街が見下ろせて美しい湖畔が一望できた。湖の中にある島は図書館島というらしい。

どっからどう見ても外国の一景色にしか見えないのだが、本当にここは…日本だった。

資料によると、明治の頃からこの麻帆良はこんな感じらしい。

麻帆良…どつかで聞いたような覚えがある名前なのだが、どうしても思い出せなかった。

まあ、いいか。

隣ではテッドがはしゃいでいる。

大人ぶったりするものの中身はやっぱり子どものようなうだ。

ティオはため息をつく。

やはり俺の中にある日本ではないことを再確認したのだ。手には日本地図を持っていた。

本には2003年と書いてあるが、その年は何があったか年なのかもしれないと思えなかった。

少なくとも俺は中学生の頃だったように記憶している。

この世界がパラレルワールドであることは疑いようもない事実として、本の読み手をどうやって見つけるか、そればかりが頭の中を駆け巡っていた。

「よお、何辛気臭い顔してんだよ？」

「あのねえ……。少しは真剣になりなさいよ」

「あん？」

「パートナーなんだけど、テッドはどうやって探すつもりなの？」

「どうにもこうにも旅して探すさ。気が向くまま足の向くままさ。パートナーなんて適当に見つかるだろ？」

「あのねえ……」

脱力するティオ。

それを不思議そうに眺めるテッド。

「何だよ、ティオ。今からそんな心配か？」

「心配もするわーっ！！ こないだみたいにパートナー付きの凶悪な魔物だったらどうするのよ」

「あの冷氣吐く奴か？ レイコムとかいう？」

「パートナーなしに正面からぶつかっただろうするのよ。毎度毎度運良く見逃してくれるのばかりじゃないんだから！」

「まあ、正面きつてぶつかっただのなら俺の目の前にいるけどな」

頭をかくテッド。

その言葉がティオにもろに突き刺さる。

「うぐっ……」

「まあ、パートナーいねえと魔法もまったく使えねえしよ。まあ、いた方がいいよな」

「いなきやられてお終いでしょ……」

ガラス窓に背を預けてティオは呟く。

脳裏に蘇るのはレイコムとそのパートナー。

冷たい眼をした魔物だった。

あの時は取り入れれば何とかなるとか思っていた自分がいた。

でも現実にはまったく甘くなかった。

「どうやって探すか…本見せて読めるか訊きまわるのか？」

「一番簡単で確実だけど、呼んでくれる可能性が低いわ。小さい子どものお遊びに付き合う大人なんていないわよ」

「何だ、もう試したのか？」

「いや…別に、そういうわけじゃ……」

というか知ってるだけだ。

ウマゴンはよくやってたはずだ。

「宣伝とかどうよ？ この世界のテレビ使ってさ」

「自分からのこのこと餌食にして下さいって言ってるようなもんじやない。できるかどうかは別としてだけど」

「じゃあ、どうする？」

「…本の読み手と魔物は多分引かれ合う性質があるはずなの」

「え、マジで？」

「うん…」

コクリ、とティオは頷く。

推測だけど、多分そう、とは言えないので原作での魔物とパートナーの関係を思い出していた。

魔物の性格や性質に近い本の読み手が選ばれる傾向がなかったかどうか？

例外はあるが、コルルとお姉さんの関係を思い出していた。

二人とも優しかった。

優しすぎたが故にコルルは暴走させられたのだから。

「戦いを魔物が望まない時、この本は魔物の力を暴走させて無理矢理戦わせるの。パートナーの心の力を使ってね」

「おい…何だよそれ？　ずいぶんえぐい話じゃないか」

「魔本にはそういう魔法がかかっている。だから魔物同士を戦わせるために本は魔物と読み手を出会わせようとする。そういう風に考えられない？」

「じゃあいずれにしろ出会うってことか。戦わせるために。ティオも戦うんだよね？」

そう言ったテッドの表情は真剣なものに変わっていた。
ある事実をもう一つ告げよう。

「もしテッドのパートナーが戦いを望んで、その相手が私だったとして、テッドが戦いを拒否して逃げ続けようとしたら本の強制力で心乗っ取られるわ。どんなに強い意思を持ってもそれから逃げられないの」

「俺とティオが敵同士になるかもしれないんだな」
「ええ」

重苦しい空気が二人の間に漂う。
最初に言葉を切ったのはテッドからだった。

「じゃあ、そうならねえように頑張るさ」

「へ？」

「人間も悪い奴ばかりじゃねえ。話せばわかるのもいるだろ？　俺とお前は本来は敵同士だろ？　でもよ、俺はお前とは戦いたくねえ。友達を傷つけるのは性分じゃねえ。俺はよ…友達を守る男になりてえんだよ」

「テッド……」

テッドの言葉が胸の内にじんわりと広がる。
こんな風に声をかけてくれた友人と言えるものを持ったことなど

なかった。

無味乾燥な人と関わらない生活の中で、いつしか人に頼ったり、甘えたりする。

そんな当たり前な人間関係さえ否定していた自分がいたのだ。

だからそんなテッドの言葉に、思わずまぶたが熱くなつてホロリ、と熱い涙が頬を伝わっていた。

私はやっぱり駄目なのだ。

人を利用するだけして利用して生きる。

そんな生き方、一度でも温もりを求めた者にそんな真似などできはしないのだ。

そんなことにいまさら気がつくなんて…私はなんて馬鹿なんだろう。

「と、友達……」

「ん？」

「私達、友達でいられる、のかな？」

顔を伏せるティオ。

ふっとテッドは笑った。

「ティオ…こっち向けよ」

「うん??」

「当たり前だつああああ!!」

「ひゃーっ、お、大声出さないでよ。心臓止まるかと思ったじゃないのっ!」

「あっはっは。でえー」

笑うテッドの背中をティオが思い切り手の平で張り飛ばしていた。

展望台のエレベータが開き、サングラスをかけた数人の男達が降りると、二人の魔物のいる場所に向かって歩き出していた。

一様に無言で、物々しい殺気に包まれていた。

周囲からはどういいうわけか人氣が完全に失せている。

ティオとテッドがその気配を感じ取った時、男達は二人の前に立ちだかっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6079z/>

俺がティオでネギま！で魔界の王になる戦いに巻き込まれていた【ネタ】

2012年1月5日06時51分発行